

パネル

世界認識が宗教研究に何をもたらすか——可能性と留意すべき点——を考えたい。

玉城康四郎の仏教学と

現代スピリチュアリティ研究

伊藤雅之

一九七〇年代後半以降、「宗教」と対置されたり、代替されたりするものと（少なくとも）当事者によつて理解され、表現される「スピリチュアリティ」の存在が明らかになると、それに呼応する形で現代スピリチュアリティ研究は展開してきた。この研究領域では、人々の自己を超えた不可知、不可視の存在とのつながりを「スピリチュアリティ」としたうえで、人々が何とつながり、どのような気づきを得るのかという当事者の体験にとりわけ注目する。それと同時に、研究者自身のあり方にもスピリチュアリティ研究においては着眼がある。といふのは、現代を扱う宗教研究者は、研究対象との相互影響関係におかれてしまうことが避けられないからである。またより重要なことは、担い手の体験に焦点をおく分野において、研究者自身による宗教体験の有無は対象の選択、理解の仕方に大きく影響する可能性があるからである。

研究者自身の宗教体験と研究との関係について考える手がかりは、宗教学と隣接する仏教学のなかに見出すことができる。本稿では、インド学・仏教学の分野で多大な業績を残し、同時

に学生時代から六〇年以上も真摯な瞑想修行を続けた求道者である玉城康四郎（一九一五—一九九九）による研究アプローチに着目しつつ、現代のスピリチュアリティ研究への応用可能性を模索する。

玉城によれば、対象理解には二つの異なるアプローチ、すなわち、対象的思惟と全人格的思惟がある。対象的思惟とは、通常の主観と客観とが相対する思惟であり、日常生活から、科学（今日の仏教学を含む）にいたるまでのすべての頭脳的な思考を指す。一方、全人格的思惟とは、頭も心も魂も、そして体も、全體が一つとなつて當む思惟であり、そこでは「考える自分」と全世界、全宇宙とが一つになつているとされる。これは、いわゆる禪定（形としては坐禪）を指し、仏教の根本的態度の特徴となる。玉城は一九七〇年代半ば以降、「業熟体」（はるか過去からの行為の積み重ねの結果として、いまここに生きつつある私自身）を軸とした全仏教史の通觀を試みるが、その概念との出会いには自身による瞑想実践が不可欠であったことを繰り返し述べている。

近代仏教学は、科学的実証主義、隣接分野との協同により大きな発展を遂げたが、解脱へ方向づけられた仏教本来の学を捨てて、たんに知性的な判断に委ねてしまつたと玉城は批判する。そして研究者自身による宗教体験なしでの対象理解は不十分であり、そもそも研究と実践とは不可分であるというのが玉城の研究態度の根幹にはある。

玉城自身による近代仏教学批判は、インド学・仏教学の領域内においても十分な議論がおこなわれてきたわけではない。そ

パネル

れでは、そもそも近代科学の産物と言つてもよい宗教学、宗教社会学、その一領域である現代スピリチュアリティ研究において、玉城の近代仏教学批判はどこまで応用可能なのだろうか。仏教学に限らず宗教学全般において、研究者自身の宗教体験の有無や質が、研究対象の選択、対象へのアプローチ、対象理解に大きな影響を与えることは事実だろう。もちろん、研究者の資質や志向性、あるいは研究対象の特殊性などを考慮して、個人的な宗教実践をしない、あるいは実践はしてもプライベートな事柄として研究にできるだけ関連させない、というのも自覚的な選択として認めてよいと思われる。だが、玉城が仏教学において提起した諸問題は、当事者の体験に着目する現代スピリチュアリティ研究においては、少なくとも研究者自身による体験について議論の俎上にのせることがきわめて有意義ではないかと思われる。

パネルの主旨とまとめ

葛 西 賢 太

瞑想から得られる知はどのような性格をもつか、宗教研究に何をもたらすのかを再考したい。瞑想を単純に是認する素朴な体験主義も、デタッチメントを客觀性の担保とする素朴な実証主義も問題を残す。瞑想テキストの解釈と注釈に専念する文献学のような伝統がある一方で、瞑想実践が、それと隔てられて存在すること——美容のためにヨーガを実践する人々は、ヨー

ガスートラを読まず、時にはその存在すら知らないなど。素朴な実証主義でも素朴な体験主義でもなく、このようなギャップを架橋する道が見出しうるだろうか。瞑想実践者の立場性の反省を踏まえつつ、その可能性と限界を問うことができるだろうか。

【鶴岡賀雄氏コメント】 本パネルでは瞑想 meditation という実践を、研究対象としてではなく研究方法として導入するとの可能性が問われた。この問題に関して二点コメントしたい。第一点は瞑想の概念規定について。「瞑想」を宗教学の術語として用いるには、その内包的および外延的定義が未だ曖昧に思える。また、この言葉自体はキリスト教の修道制に由来するものであり、この語の概念史や系譜学的検討が必要となる。付言すれば、修道生活においては、修道者としての信仰や生き方の全体からいわゆる瞑想だけを切り離して実践することは考えられない。これは次の第二点に関わる。研究者が、個人的求道だけでなく学問研究に資するものとして宗教的瞑想を行うという発想は、それが生まれた特定の宗教伝統と切り離して実践しうるものとする瞑想理解、および研究者の身分保障を前提するだろう。キリスト教神学が強力だった十九世紀の宗教学成立期には、宗教学者は自身の信仰や実践と学問研究を切り離すことでの自立を確保しようとした。しかし今日では世俗的宗教学と神学との力関係が逆転し、宗教の力に呑み込まれず宗教について学的に語る制度的自由が確立している。バララは自然科学、井筒や玉城は厳密な文献研究という自律した知の基盤を確保していたからこそ、特定宗教に所属せずとも瞑想